
戦極姫異伝

聖生活(笑)

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

戦極姫異伝

【Nコード】

N3978W

【作者名】

聖生活（笑）

【あらすじ】

戦極姫の二次創作です。

拙い文で申し訳ないですが、手探りで進めていきます。よろしく願いいたします

間もなく一区切りつきます。つきましては近々アンケートを実施したく思います。よろしければご意見ください

ある若者の旅立ち？（前書き）

戦極姫の二次創作として書いていきます。独自の設定、世界観、解釈が多々あります。キャラクターは1から3までを使いつつ、戦極姫本編で出てこなかった人物も書いていきます。

ある若者の旅立ち？

世は争乱の時代

時の室町幕府の権威は意味を持たない。諸国の豪族、大名達は領土、領民の平穩、自らの野心の為に力を蓄えていました。

そんな世の中。京より離れた九国の更に南端の薩摩に一人の若者がいました。

若者視点

「やれやれ。やっと、この日の本を北は奥州から、南はここ薩摩まで見聞したか。長かったなあ」

この若者の生家は北奥羽にあった。そう、あったのだ。この若者の名は天城颯馬といい、嘗てはさる豪族の一族だった。ところが豪族同士の小競り合いにおいて、一族は颯馬を遺して全滅。途方に暮れた颯馬だったが、武芸をそれなりに修めていた。さらに、軍略についての知識をあったために流れの軍配者として食い繋いでいた。このようなある意味幸運が重なり、今日まで生きてこれた颯馬であった。

今まで軍配者として一時期身を寄せた大名はかなり多い。だからこそ、庶人よりは情勢に明るく、これからどうするか考えていた。

「これからどうするか。大名に仕える事が出来ればいいかも知れない。天城の家を再興したいと思う。しかし、また捨て石にされるのは御免だ。どうするかな」

そう、彼は流れの軍配者として大名や豪族に身を寄せた時に一部の者から捨て石にされた事があった。故に大名、豪族に仕えるのには些かの抵抗があるのだった。

たとえ流れの軍配者の様な者を捨て石にしても、大名

からすれば痛みは少ない。理屈では颯馬とて理解できる。

かといって唯犬死にするのは皆目御免である。その様な時においても、見事に圀としての任を果たした。しかる後に暇ごいをしている。さりとして、彼は武芸者としては一般よりやや上の程度。武芸者として食べていくことなど望むべくもない。かといって、兵法家としても一流とはいえない。大名、豪族に仕えるのはある意味仕方のない事なのだろう。

そんな感じで悩んでいると、向こうで騒がしくなった。気になったので、颯馬が向かうと、ある少女が浪人風の男達に圀まれている。どうやら浪人達に粗相をしたようだ。颯馬としては見捨ててはよい気分になれないために割ってはいった。

なんとか仲裁に成功した颯馬は考えにふける。

これからどうするべきかを

ある若者の旅立ち？（後書き）

はじめまして聖生活（笑）です。

戦極姫の二次が少ない。ならば書いてみよう。的な発想の元で書いております。よろしければおつきあい下さいませ。

こんな駄作に批判、ご意見、感想をいただけると狂喜します。

天城颯馬の歩み（前書き）

颯馬の経歴です。

多分にご都合主義的な設定ですが見てやって下さい。

天城颯馬の歩み

北奥羽の出身

父親は地方豪族の出身　母方はさる大名家の庶流の出身

実はいいところのボンボンである。

が父親、母親双方の考えに基づいて武家としての教育を施す。

北奥羽では小勢力の戦が絶えなかった為に戦に出た事も幾度かある。天城の家が仕えていた豪族が滅んだ際の戦にて父親は戦死。母親は殉死した。颯馬は母親や周囲の大人に諭されて生きる事となる。

浪人の頃には、武家として受けていた教育を活かした。時には一兵卒として、軍配者として大名に貢献した。しかしながら見聞を深める為、日の本を巡る事を目的としていた為に暇をもらつ。全国を巡った為に情勢には明るい。

仕えていた大名

伊達家、最上家、武田家、北条家、佐竹家、今川家、織田家、北畠家、六角家、三好家、石山本願寺、浅井家、山名家、尼子家、大内家、長曾我部家、大友家。順不同

颯馬仕官当時の各勢力の当主。伊達の当主は輝宗。武田の当主は信虎。織田の当主は信秀。長曾我部の当主国親としておきます。

時系列的にはあり得ませんが、原作が時系列を気にしてない様なのでご容赦下さい。

伊達、最上の頃は武家としての振る舞い方や仕事の仕方の違いからお荷物的な扱い。武田では、甲州流軍略、武田流騎馬術を学び、北条で内政、今川である人物の御伽衆を一時期勤めた。織田では信秀の息女に東国諸国の情勢を話したりした。佐竹、北畠では武芸を

学び、戦にて前線に立った事も。六角、三好では堺や京にて商人から火縄銃、大筒などの運用法を試案したり、忍びから、暗殺などの技術を学ぶ。三好のとある人物より、謀略の必要性を学んだ。

本願寺では今の宗教の実情を目の当たりにした。雑賀衆から火縄銃の扱いについて学んでいる。

尼子、大内では銀山の開発などに従事した。

長曾我部では実際に部隊運用を任せられた。跡取りの人物に対する教育も行っている。

大友では南蛮新教の扱いの難しさについて理解した。

以上の経歴からか、内政、軍備ともに意外に出来る颯馬だが、生来の気質からかやや抜けている。

他人からの好意にはとかく鈍感である。

作者が思うには、戦極姫的に統率9、智謀11、政治10といったところだろうか。

天城颯馬の歩み（後書き）

以上です。

織田家の信行さん。徳川勢は3仕様としております。但し徳川勢には服部殿を入れます。1仕様で。

颯馬の悩み（前書き）

今回は颯馬の軌跡？とこれからの流れをどうするか？な話です。

颯馬の悩み

颯馬は悩んでいた。

目の前には、刀、槍、二挺の火縄銃？がある。一応これらはさる大名から職を辞す際に賜ったもの。

刀は通称貞宗。名刀である。

槍は瓶通し。これまた名刀？である。

種子島？の一つは、あーごつと銃というらしい。南蛮渡来のものだ。もう一つは近江の鍛冶職人が造った国友筒だ。

何を悩んでいるかという、どの勢力に仕えようかという事。そしてそれを武器として、主に使うかということ。刀は一番馴れている。しかしながら槍の方が間合いは広い。まあ、間合いでいうなれば、火縄銃が一番であるのだが。

話しは変わるが、颯馬にはその道の師という人物はかなりいる。かつて颯馬には三好家に仕官していた時期がある。その頃に三好廉長の部下として籍をおいていた。が、茶道に無学過ぎた故に松永久秀殿によって茶道を仕込まれた。松永殿曰く、茶道は交渉などに役に立つ。だそうだ。その為堺の千利休より名物早船を購入している。

武田家において甲州流軍略を山本勘助殿より教授された。その後は今川家で大原雪斎殿、大友家で角隈石宗殿にそれぞれ軍略を教授されている。かなり恵まれているといえるだろう。今川家で一時期とある人物の御伽衆を勤め上げた。際に褒賞として名槍瓶通しを拝領したのである。

武芸は佐竹家の真壁氏幹殿、北畠家の次期当主の具教殿、三好家の十河一存殿、大友家の吉弘紹運殿らに師事した。一方で種子島

の扱いを雑賀衆の雑賀孫一殿より教授されている。

また、父親より、お主は何にでもなれよう。だが、何者にもなれん。との矛盾する言葉を幼少受けている。

颯馬としては何が言いたいかわく理解出来ないのであるが。

現在の全国の動きは極めて複雑。足利將軍家の権威の地盤たる各地の管領。これは衰退の一途をたどる。ことに畿内の管領細川氏は三好家によって勢力を減退させている。

さあ、颯馬の明日は何処へ？

颯馬の悩み（後書き）

アクセス500突破？

この様な駄作を見てもらいありがとうございます。

次回に向けて構想中なのですが・・・どのルートにしようか正直迷っております。

よろしければご意見いただけると嬉しく思います。

次回更新は明日の夜中頃と予定しております故、よろしく願います。

番外編、ある転生者の一生涯？（前書き）

成功者の裏には失敗する者もいる。そんな話

番外編、ある転生者の一生涯？

イヤッハー！戦極姫にキタコレ！これでかつる。
そう思った時代がありましたよ。

……確かにさ！戦極姫ですよ。間違いなく！……でもさ、
何故に、よりにもよって、備前の国の浦上宗景？

何故？Why？

すぐそばに真つ黒宇喜多いるし、しかも宇喜多三老モブじゃね
え！3か！3なのか！一番ヤバ気だろうよ！

家臣いないし、北に尼子、西に宇喜多、南は三好。東の播磨は
独立勢力でこつたがえしてるし、どうせいゆーねん。

ハハッ詰んだ。

ゲーム的な結論からいうと、浦上宗景は開始1ターンで滅亡し
ました。

戦国での転生は甘くはないようですね。

番外編、ある転生者の一生涯？（後書き）

世知辛い話でした。

なお、本編の颯馬が全国を巡っていたのは、ゲーム的にはプロローグ的な物です。

戦極姫の群雄モードはキツかいです。

府内、大友そして颯馬（前書き）

とりあえずは書きたかった。颯馬が大友家にいた時の話。

府内、大友そして颯馬

天城颯馬は悩んでいた。今、彼は府内の町にいる。では、大友に仕官をするのか？と言われると、違う。

颯馬は大友に在籍していたころは吉弘家の客分として存在していた。しかし、吉弘家当主より政の手伝い等を請われた訳でない。

颯馬が大友家、いや正確には吉弘家に世話になったのは理由がある。

当時の府内の町は南蛮新教と既存の宗教が対立していた。戸次道雪（敢えてこうさせていただく）や、角隈石宗らの尽力により本格的な対立は避けえてきた。しかし、個人間や一部の強硬派によって起こされる衝突までは防ぎようがなかった。

当然と言うべきか、別段戸次、角隈らの力が及ばないのではなかった。問題にすべきは南蛮新教側である。

大友家当主大友義鎮。彼の人物は南蛮新教の教えに感銘を受けた。彼女は洗礼を受けて、フランスとの名をいただく。故にその教義を広める一助をしたのである。彼女が個人の範疇で布教の助勢をしたならよかったのだが、とは大友家臣の言である。南蛮新教の布教を推進するカブラエルなる人物。この人物は既存の寺社、仏閣を潰してその跡地に教会を建てた。

この暴挙により、庶人と南蛮信者の間で時には揉め事を引き起こしたのである。　　たまたま府内に立ち寄った颯馬は、その争いに巻き込まれた。故にその騒動を鎮静化した吉弘家当主により、詫びを兼ねて滞在許可を貰ったのである。

無論、颯馬とて額面通りに受け取った訳でない。対価として、吉弘家や角隈石宗殿らに差し支えない程度に状況、情勢を論じていた。事に畿内、山陽、山陰の情勢にはかなりの価値を見出だしたようだ。見返りとしてか、角隈石宗殿より軍略を教授して貰えたのは幸運という他ない。吉弘家の紹運殿よりは「男子たる者武芸を修め

ねば」との言により、武芸の修練の相手をして貰えたのは颯馬的には嬉しくも微妙だったが。

意外にも府内では、濃い時を過ごした颯馬だった。南蛮新教と既存の宗教の対立を理解していた。それ故に、今の府内の町の雰囲気疑問を持たざるを得なかった。

彼の悩んでいた内容はまさにそこにあっただのである。

府内、大友そして颯馬（後書き）

大友家な話。

大友のメインキャラは、当主義鎮。道雪、紹運、あともう一人います。

南蛮の足音または、別名大友ルート（前書き）

大友ルートです。

ヒロイン？未定です。南蛮新教にアレな役目を振ってますが、個人的に含む所はありません。

南蛮の足音または、別名大友ルート

府内の町の違和感

其れを果たして見て見ぬふりをすべきか？颯馬の悩みの原因である。

前述した様に、天城颯馬には大友家に少なからずの恩がある。ついでに知人、友人も存在する。無論、今は戦乱の世。そこまでの義理をたてる必要があるかと問われると疑問である。

三好家の某人物や、尼子家の当主にいわせるならば、友義を感じるは勝手。それを期待するのは、また別の話。

とても言われそうだが。実際、颯馬は様々な勢力を渡り歩いた。端から見れば不実、不義理以外の何物でもなかるう。

「それでも、譲れない物は確かに存在する」

これが颯馬の根幹にある。

さて、話を府内に戻そう。彼が違和感を覚えたのは、府内の町の一角に存在する筈の、寺院のある区域だ。そこに南蛮信者や、庶人等が集まっている。それだけならいい。致命的なのは、寺院の方角から煙が上がっている。しかも明らかに何かを燃やした様な黒煙が、である。

何故、寺院から黒煙が上がっているのか？何故、南蛮信者と、それと対立する人々が集まっているか？何故、大友家の人間は駆けつけてこないのか？

颯馬には理解出来なかった。いや、正確には理解しなくなかったのである。

黒煙の上がる寺院。ここは角隈石宗殿の領有する寺院。しかも石宗殿はここで起居することが多い。颯馬にとって、角隈石宗とは軍略の師である。と共に早くに亡くした父親の様に慕っていた人物である。

「石宗殿！」颯馬は人混みを押し退けて燃え盛る寺院に突入した。周りの者達は無茶だの、引き返せだの言っていた。しかし、颯馬には届かない。そんな些事は彼に届くはずもない。

一度自分の父親を亡くした。しかも自分の手の届かぬ処でだ。今なら届く。そう思っている故に

彼は、颯馬は気付かない。というものを

同時刻、某所にて

南蛮人「オマエもヤルコトがヒドイモノダ」 この人物はさる人物の命により、南蛮新教の為にある人物の指示に従っている。

この人物の正面にいる人物こそ南蛮新教の中心人物。

カブラエル布教長

府内を中心に勢力を持つ大友家当主、義鎮に取り入って九国における南蛮新教の勢力を拡大した人物である。民に対しては温厚であるが、敵対者に対しては飴と鞭を使い分けて排除する。

カブラエルと対面する人物は鞭。とりわけ暗殺、脅迫等で真価を発揮する危険人物だ。便宜上はロウと呼ばれている

カブラエル布教長「酷いとは心外ですネ。私は唯、今日という日を南蛮新教の新たな一歩にしたに過ぎませんヨ」

ロウ「ヨクモマア。ンデ、ジャマナアノジントソコノヤツヲハイジョシタト。ヤルコトがヒドイダロウよ？」

カブラエル布教長「全ては南蛮新教（我々）の為。石宗は有能ですが、故に邪魔でした。ツールと違って常に府内に居ますからネ」

ロウ「マア、ソレモココマデダロウヨ。カヤクモシコンデル。アトカタモ、ノコサナイダロウヨ。モトモトアイツハケガデウゴケナイダロウシヨ」

そう。彼らは府内に常在する石宗を実力で排除したのだ。それ

によつて南蛮新教を更に広める為に。

再び颯馬に視点を戻そう。石宗殿を救つべく、焼け落ちる寺院に突入した颯馬だが、元来木造建築の寺院。焼け落ちるまでに時間はありません。颯馬は石宗殿が一番奥の部屋にいつもいる事を知っていた。しかし、瓦礫のせいで思う様に進めない。颯馬は焦りの余り注意を怠つた。頭上のはりが彼に襲いかかる。

ガシャン

「ぐつ。」颯馬は意識を失つた。不覚にも、颯馬は瓦礫の下敷きとなつたのである。

丁度この凶事の最中、府内の至近にある軍勢があつた。吉弘家の軍勢である。

吉弘家とは、豊後大友家でも重きをなす家である。現当主、吉弘鑑理は豊後三老の一人であり、大友の現状を危惧する人物でもある。

「父上。此度の戦は些か妙ではありませんでしたか？」と鑑理に問うのは、吉弘紹運。鑑理の娘である。紹運はおなごながらに（とは言つても、諸国の名将、名君には女性が多いが。）武勇に長じ、戦働きにおいても目の覚める様な働きをする。実の娘故に、もう少し女らしくして欲しいのが鑑理の密かな悩みであるのだが。「と、いうと、どういう事か。紹運」「はい。我々は日向の伊東家が佐伯殿に大軍を向けた。との報により、佐伯殿の援軍に参りました。しかしながら、行ってみれば敵はない。しかも佐伯殿は援軍の要請すらしていないとの事」「余りにも不自然、か」

鑑理とて、今回の動員には違和感があつた。

まず、発端の筑前での秋月残党の挙兵。つづいて、隣国、龍造寺の筑前侵攻。相良家の阿蘇家に対する侵攻。そして、佐伯殿に対する援軍。

これに対して大殿（義鎮）は秋月に高橋勢、龍造寺に戸次勢、阿蘇家への援軍は府内の軍勢を、佐伯殿への援軍は我々吉弘勢を。これでは府内が空になるとの事で、軍師の石宗殿が残ったが。腑に落ちないのは鑑理もだった。

「何かを見落としているのか？」嫌な予感が拭えなかった。

「父上やはり」と紹運が切り出そうとしたその時。

「申し上げます！」明らかに常と違う様相で兵が駆け寄ってきた。鑑理は如何な事かと問おうとすると、「府内の角隈石宗様の寺院が炎上中」との報告をした。

鑑理は一瞬、ほんの一瞬思考が停止した。「石宗殿の寺院が？何故？」と動揺するも、「直ちに兵を向ける」との指示を出した。それと共に紹運には手勢を連れて現場に急行する旨を命じる。紹運はそれに応じ、直ちに手勢を連れて駆け出した。

副将には現地に向かい、現地の混乱を治めるように指示を出す。鑑理は府内城に向かった。

これが後の大火となり、ある一人の人生を狂わせるとは、今は誰も想像だに出来なかった。

南蛮の足音または、別名大友ルート（後書き）

という訳で大友ルート第一話的な話でした。

このルートはダーク気味、かつシリアスになると思います。

主人公の生死は？道雪様は？紹運は？などの意見もございませうが、次回に期待という事で

暗闇の中で（前書き）

大友と颯馬。二つの物は暗闇の只中でもがき続ける。

暗闇の中で

紹運は焦っていた。父、鑑理の言い付け通りに現地に急行したのはいいが、余りの火の勢いに鎮火を断念せねばならなかった。

「中に人は居るか？」と紹運が民に聞くと、一人火の中に突入していったという。「無謀」彼女にはそう思えた。当然である。

この寺院は木造建築。しかも長い年月を経ている為に補修を繰り返している。新しい建材より、老朽化した建材の方が延焼しやすい。さらに崩落の危険すらある。誰がそんな所へ突入などするのか？紹運は暫しの思考の末に決断し、兵達に伝える。

「皆、よく聞いて欲しい。私は中に突入して、先に突入した者を助ける。お前達は引き続き周囲の警戒と監視を頼む」それに対して兵達よりは「危険にございます。寧ろ、我々が参ります」という意見が出る。紹運としては、仲間の思いやりに感謝したい。

しかし、時間の猶予はない。ならば往くしかない！「すまないが、頼んだ」と言い、寺院の中に突入した。

颯馬は夢を見ていた。その中で幼い颯馬がいた。父に母が共に笑いあっていた。そんな夢だった。そんな中、戦の為に父は手勢を連れて出陣した。数日後に父の戦死。そして仕えていた家が滅亡した事を敵方の使者より聞いた。つまりは降伏勧告である。

天城家の拠点は非常に攻めづらく、守るに容易い。ならば降伏させて、自家で利用しようと思ったのだらう。母は、さる大名の縁者である故か最期まで武家の女としての生き方を貫く事にした。つまりは戦って死ぬ事を。

颯馬は天城家の唯一の跡取り。故に颯馬の母は、長く天城家に仕えてきた小姓に命じて颯馬と逃げる事。出来れば実家に保護を受ける事を命じる。

天城家の拠点は多勢に無勢ということもあり、落ちた。が、颯

馬と小姓は落ち延びた。天城颯馬八歳の時の事である。

「・馬・」「颯・・」「・・殿」「颯馬殿！」颯馬は誰かに呼ばれた気がして目を覚ませた。

そこには、懐かしき吉弘紹運の顔があつた。

一方府内城ではフランス（大友家の殆どはこの名をよしとしていないが）と吉弘鑑理が謁見の間にて対面していた。

フランスは「今回の佐伯殿に対する助勢ご苦労様でした」と切り出す。鑑理は「いえ、助勢と申しても我々は何もしておりませぬ故」と返し、「此度の援軍は必要でなかったのでは？」直接切り込んだ。それに対してのフランスの言を期待したが「吉弘殿の言われることは最もデス。しかし、この地に踏み入ろうとする彼等を見逃す事は出来ません」と言を挟む者がいた。

本来なら主君の言を遮るなどはしてはならぬ事。故に鑑理は表情を歪めた。この宣教師が居る事自体に問題がある筈だ。しかし、フランスの信頼を勝ち取ったカブラエルはそれを許されている。

（狸めがっ！）鑑理はこれ以上の追及を諦めた。ふと、府内の角隈石宗の寺院が炎上している事を義鎮が知っているか気になった。が先に事態を治めるべきだと思い直し、謁見の間を辞した。

颯馬を見つけた紹運は安堵すると共に若干怒っていた。石宗殿と颯馬殿の間柄は理解している。だが、このような事をして、石宗殿は喜ばないだろう。寧ろたしなめるだろう。常々の颯馬なら理解している事を今は理解出来ていない。つまり、動揺しているのだ。以前に自分が義姉様と呼ぶ人物より、「よいですか？紹運。まずは冷静にならねばなりません。それを怠れば様々な事を見逃しますよ」と言われた事がある。（兎に角、颯馬殿は怪我をしている。早く外に連れ出さねば）と紹運は思い、気絶している颯馬を背負い脱出す

る事にした。

「父上」そう無意識の内に溢した颯馬の言葉が、紹運の心に残った。炎上する寺院より脱出した紹運を待っていたのは、父の鑑理による説教であった。曰く「将としての自覚が足りないとか。自分勝手な行動は控えるとかであった」紹運にも思ふ処はある。しかし、父親としての思いがある故に、安易に否定出来なかった。無論屋敷に帰ってからではあったが。

颯馬は暫しの間は吉弘家にて療養をするように鑑理より言い渡された。颯馬の怪我は左手を骨折との事だった。が何より衰弱が顕著だったようで、この二日間、目を覚ませていない。

各地に派遣された大友家諸将は、石宗の寺院が南蛮新教の手で行われたのでは？と憤慨するも、戸次道雪よりのたしなめで事なきを得た。

一方でそのたしなめに顔をしかめる人間もいたが。

筑前、立花山城

この城の城主の間に二人の人間がいた。ここの城主、立花鑑載と筑前の名家高橋家当主、高橋鑑種である。彼らは豊後大友家の中でも重臣中の重臣である。最前線にして、重要な筑前を任せられる。それだけで信認の度合いも理解出来よう。彼らは今の太友家に不安があった。府内において軍師の角隈石宗が亡くなった。しかも、寺院を焼かれてである。これは本拠、府内においてさえも太友家の影響に及ばない部分がある。その証拠ともいえる。このままでは太友は滅ぶ。彼等には太友家を存続させる義務がある。彼等の苦悩はまだ絶えず、太友家は暗闇の只中であつた。

暗闇の中で（後書き）

大友ルート第二話となりました。道雪様、回想のみですっ！
じ、次回こそだせるといいなあ。このルートにおける颯馬は
1と2を掛け合わせております。

紹運はメインです！鑑理もメインです！

後は察して下さい。

因みにゲーム的には1ターン目のイベントかな？

あとは作者の戯言ですので、スルーしてもかまいません。

島津ルートにたかぴーはいるか？

毛利ルートは3仕様にすべきか？

三好ルートに長慶エンドはいる？

上杉ルートに柿崎ユニークはいるか？

私の悩み所です。

その頃の東国の情勢（前書き）

大友家で一連の騒動が起きた頃の全国各地の有力大名の話です。都合上、武田六名臣としてますが、本来は四名臣ですので、悪しからず

その頃の東国の情勢

大友家が暗雲の只中にある頃、他の名だたる勢力はどうなっているのか？少々全国各地に目を向けよう

奥州伊達家

先代当主、伊達輝宗が亡くなってから早、一年が経過した。輝宗の父の伊達晴宗が完成させようとした大勢の家臣団はいまや、見る影もない。そも、現伊達家当主、伊達政宗は暗愚でも暗君でもない。寧ろ名君と言つてもいい。治世、軍政共に秀逸である。では家臣団が減つたのは何故か？

それは、伊達政宗が先代伊達輝宗を手にかけてから。であるのだろう。詳細を知る鬼庭、片倉、支倉や、伊達一門の成実は留まっている。しかも伊達の元家臣は、伊達の所領の城を占拠し、独立した。その為、伊達家の支配力は一国にすら及んでいない。元本拠地の米沢すら確保出来ない有り様であった。

その伊達の隣国にして、伊達の実同盟国の最上家

この最上家は颯馬の母の実家であった。故に颯馬は二年ほどはここで生活していた。

隣接する伊達家と同盟している最上家だが、然程に情勢はよくない。

当主、最上義守。通称もがみんとの名で親しまれている。彼女は内政において、優れた才を持っている。気弱な性格だが、芯の強さはあるらしい。家臣団は多いとは言えぬ。最上義光、最上義守を母者と慕う人物だ。最上家の武威を象徴する武技を持つ。残りの氏家らによつて支えられている。

関東、常陸を中心に勢力を持つ佐竹家

この家は尚武の気質を色濃く持っている。当主、佐竹義重、その片腕の真壁氏幹。鬼と夜叉と称される。

同じく関東、相模を中心に勢力を持つ北条家

当主の早雲を筆頭に優秀な人材を幅広く持つ大名家だ。早雲の息女、氏康。一門衆の綱成。北条抱えの忍び、棟梁の風魔小太郎らを中心に結束している。後述の武田、今川とは同盟関係であり、関東統一を目標としているらしい。

前述した同盟の一角の今川家

当主、今川義元公は政戦両略に通じた人物である。軍師大原雪斎は隣国の武田、北条にも知られる名軍師である。更に忠臣、朝比奈泰朝が控えており、国力もある為に侮れない力を持つ。

ただし、後継者の今川氏真は政戦に関心、造詣も無く、蹴鞠や和歌に興じているそうだ。

甲斐の国を中心に勢力を持ち、優秀な家臣団を持っているのが武田家である。

武田家前当主、武田信虎は甲斐の一豪族に過ぎぬ武田家を、政戦両略を使い、強行に拡大させた。

ただし、余りに強行過ぎた故に、息女の武田信玄らによって甲斐を追放された。その後、武田信玄は武田家をまとめあげて軍団の編成を行った。結果出来たのが武田六名臣である。

武田信玄の風林火山陰雷に基づいて六人の将を武田の中核とした。風の如く、の内藤。林の如く、の春日。火の如く、の馬場。山の如く、の山県。陰の如く、の山本。雷の如く、の真田。凄まじい陣容である。これに他の家臣を加えて武田軍団は信虎時より強化されている。

話を戻して、尾張の織田家

織田家前当主の織田信秀は前述した、今川義元率いる今川家と激戦を度々行ってきた。しかし、織田信秀が病気にて死去する。

その後、織田信秀の息女の織田信長が家督を継ぐ。これに対して信長の妹、織田信行は謀叛を企てるも失敗する。信長の恩情故か信行は処刑されていない。

織田家の家臣団は信長の傍にいる、明智光秀。織田家の軍を支える柴田勝家。内政に長じる、丹羽長秀。織田家一の出世頭、羽柴

秀吉等と家臣団も精強だ。

その頃の東国の情勢（後書き）

東国編でした

次回は西国編をするつもりです。

その頃の西国の情勢（前書き）

西国の情勢です。

その頃の西国の情勢

畿内の最大勢力の三好家

当主、三好長慶は管領細川氏、足利將軍家等を押さえた人物である。その人柄は温厚で為政者としての評判はよい。

さりとて、現在の幕府である足利將軍家との抗争を行った。それ故に幕府や將軍家に敬意をはらう者達からは敵意を持たれている。三好家の家臣団は三好三人衆といわれる家臣や、十河一存、松永久秀などの人物。更には、三好本領の阿波、畿内の国人衆も一部が傘下にいる為充実している。経済力も堺を押さえているのでかなり高い。

山陰の尼子家

山陽の大内、伯耆の山名と対立している。当主の尼子経久、家臣で一門の晴久等の尽力により当時の有力大名だった山名家との抗争により、勢力を拡大した。経久、晴久ともに知略、謀略に長ける。

山陽の大内家

大内家当主の大内義隆は決して暗愚ではない。ないのだが、常人に理解し難い感覚を持っているらしい。元家臣の陶晴賢等には独立させているらしい。大内家の家臣は有名処は相良、冷泉である。現在は敵対する陶、尼子との抗争に明け暮れている。

この尼子、大内、陶の間隙を縫うようにして勢力を伸ばしているのが毛利家である。

当主は毛利隆元。家臣団には一門の吉川元春、小早川隆景、毛利秀包らがいる。更には母の毛利元就もいて、毛利家の実権は元就にある。と言われているが定かではない。

四国には三好家以外には然程に勢力を持っている大名はいない。いって言うなれば、伊予の河野、土佐の一条、長曾我部位である。なお、長曾我部では当主の国親が病死している。この為に長曾我部の結束が弛いらしい。

九州の大名

肥後の龍造寺。

龍造寺隆信が当主である。珍しい男の当主である。軍師鍋島直茂を筆頭に龍造寺四天王が存在する。四天王は成松、百武、円城寺、信常である。断じて四天王なのに五人いるということはない。

薩摩の島津

当主貴久は名君である。家臣には息女四人が存在する。

長女、義久。ムードメーカー

次女、義弘。鬼島津の二つ名を持っている。島津の武威の象徴
三女、歳久。島津家の政戦両略を担当する。

四女、家久。姉達の補佐を的確に行う。主に仕事の多い歳久の補佐をしている。更には流石、薩摩隼人の国と言うべきか、武官は精鋭揃いである。

大友家の当面の障害となりそうなのは、龍造寺、島津、大内である。ことに龍造寺は隣国故に警戒せねばならないであろう。

その頃の西国の情勢（後書き）

今回作者の体力がヤバいので必要最低限に文量しております。
次回からは大友家の話と遂にあの方々が登場します。

軋む齒車、叶わぬ夢（前書き）

遅くなりましたが投稿します

軋む齒車、叶わぬ夢

府内城、評定の間

大友家の城主、国主以外が一同に会している。本来ならばあり得ない、そんな光景だ。

大友家の重鎮、戸次道雪とその養女宗茂。因みに道雪は豊後三老の一人でもある。豊後三老の一人、吉弘鑑理と息女吉弘紹運。豊後三老の最後の一人、臼杵鑑速である。さらに様々な人物が顔を揃えている。席の空白は一つ。今は亡き角隈石宗の席である。

そもそも角隈石宗という人物は、ただの軍師としての役割だけを担っていなかった。台頭する南蛮新教と既存の寺社などとの間を取り成せる。稀有な人物でもあった。無論石宗のみの役回りではないが、そういった役目の大半は彼の人物が担っていたのは事実だった。故にこそ石宗には立場を問わず人脈、信用があつたのだ。

その人物が本拠地で亡くなった。しかも、原因が病死でなく失火によるものである。更には、寺院が崩落する際に小規模ながら、爆音もしていたのだから、ただの事故でないと居並ぶ諸将が思ったとて不思議でない。

あるものは南蛮側の謀略と判断していた。今までの強引なやり方を見れば有り得る。そう判断できる。

大友義鎮が評定の間に入る。諸将は顔をしかめた。あろう事にその後からカブラエルが入室してきたのである。

本来ならば一宗教の宣教師が出席出来ないはずなのに。である。大友義鎮。または、大友フランシス宗麟。呼び名が二つある。

それは南蛮新教や現状に対する不平不満の表れとなる。それらの考えを持つ者達は義鎮と呼び、それでも忠誠心を持つ者達は宗麟と呼ぶ。なお、後者には道雪、石宗、紹運が、前者には他の家臣達が該当する

戸次道雪は大友家に不安を抱いていた。何せ亡き石宗は、宗麟

に忠言をする事に躊躇しない人物だった。道雪、石宗を核として何とか大友は持つているといった。

同じ三老の臼杵、吉弘の両名は中立。カブラエルは宗麟の権威の元で暗躍している。

道雪自身は宗麟の嘗ての聡明さを取り戻してくれると確信している。

だが、大友家の家臣の大半はそれを諦めている。その気持ちは道雪とて理解できる。だが、我々が大友家の家臣団である以上は信じるのも、一つの方法ではないか。と思っている。常々、他の家臣よりは宗麟に対して忠言を求められた事もあった。亡き石宗は、このままでは遠からず国が割れる。と言っていた。

更には、諸勢力の動向。とりわけ、佐賀の龍造寺、安芸の毛利、周防の大内は隙あらば攻め寄せるであろう事は最早疑いようのないことであつた。

道雪と大友の苦難の道は果てしないのであろうか。

とにかく、宗麟様の話をきいてみましょうか。と道雪は思い直す。

評定が終わり、皆は怒りや、戸惑いの最中に散会した。軍師は不在のままに戦をするのはまだよい。しかし、角隈石宗の旧領の寺院、仏閣等を南蛮の教会に建て直す。これは不味い。ただでさえ均衡が怪しいのに、南蛮よりの政策を推し進めれば確実に不満が爆発する。

あともう一件あるが、道雪としても今回の件についてはどうしても承諾しかねるものである。さりとて、あまりに騒げば現状の反対派達が暴走する。道雪自信も然程に余裕はないのである。

一方、吉弘家の府内屋敷にて、ようやく颯馬の意識が戻っていた。

吉弘鑑理、吉弘紹運、天城颯馬は対面して話をしている。無論病み上がりの颯馬に好ましくないのは鑑理とて、理解している。が、状況はそれすら許さない。鑑理は自身の力不足を嘆いていた。と同時に、内心この提案をした宗麟を呪いすらした。（この若者。幾ら、諸国を巡り軍学に精通していようと。……いや、それでも儂がせねばな。道雪殿や紹運に任すには酷な事よ。とはいえ、石宗に対する心情すら利用するとはな）鑑理は心中で自嘲した。何が豊後三老だ？何が吉弘家の当主か！主家の騒動すら治めれないなど、滑稽だ。そう感じずにはいらなかった。

「父上。私は構いませんが、颯馬殿の怪我は軽くはないのです。話があるならば、早く終わらせるべきではありませんか」と紹運は切り出した。

「紹運様のお心遣いありがとうございます。しかし、この怪我自体が某の不徳ゆえお気になさらず」と颯馬はあくまでも自然体を装って紹運に返答した。

「紹運の言う通りよな。さて、久しぶりだな。颯馬殿。」

「お久しぶりにございます、吉弘鑑理様。吉弘紹運様。此度は態々お手をかけて申し訳ありません」

「いや、そもそも儂等大友が不甲斐ない故の事。気に病む事はない。」

「ありがとうございます」

「して、颯馬殿は何故、府内に？確か見聞を広げる為に全国を巡っていたはずではなかったか？」と鑑理は問うてみた。本来ならば颯馬は薩摩へ行き、その後で仕官する勢力を決める筈である。

「それについては粗方終わりました故」との颯馬の言であるが、
「それは何より。して、こちらから颯馬殿に要請したい事がある。つてな。もし、行き場を決めてないならば、大友に仕官せぬか？」

そもそも今は亡き軍師の角隈石宗は前述した様に、その存在のみで南蛮新教に対する抑止力となれる稀有な人材。代わりの人材などすぐに見つかる筈もない。

しかし、颯馬はまがりなりにも、全国を旅している。故に各地の情勢には詳しい。と同時に知己もいよう。更には各地の勢力の軍師より様々な軍略を教育されている。おまけに武力も中々にあるらしい。娘の紹運曰く、相当の研鑽を積んでいるらしい。

颯馬が言うには「才能が無いのでその分は鍛練で補うしかないっただけ」との事だ。

（まったく大したものよ）正直な感想である。はつきりいえば研鑽を積むのは当たり前である。しかしながら、颯馬の様に各地を転々としながらの時を惜しまない鍛練は鑑理や、紹運が思うより難儀したのであることは想像できる。

颯馬の一族は自分のみが生き残った。聞くところによると従姉妹がいるらしいが（頼れない肉親のみともあれば・いや、よそうか）鑑理は逸れる思考を正した

一方、突然の提案に颯馬は戸惑いを隠せない。

確かに石宗より軍略や交渉術などを享受してきた。それを考慮するならばわからなくもない。しかし、「出来るのか？俺に。石宗様の代わりが」

その葛藤を察したのか、鑑理は「すぐに返事をいただきたいが、それは酷な事。暫しこの屋敷にて留まれよ」と言い残して紹運と部屋を辞した

軋む齒車、叶わぬ夢（後書き）

というわけで颯馬に仕官の話が舞い込みました

虚ろな眼（前書き）

初スマートフォンでの投稿

虚ろな眼

天城颯馬、大友家の軍師としての任を義鎮より任命される。

この報が府内より大友の全軍に知らされた。筑前において立花鑑載、高橋鑑種の両将は「自家の不始末を石宗殿の弟子に押し付けるなど如何にも情け無き事」と嘆き、他の城主、国主は天城某の力量に疑問を抱いた。

一方で既知の仲の吉弘鑑理、紹運親子は颯馬の前途を危惧している。

戸次道雪は今は亡き石宗の弟子にして、親子のような仲の颯馬に重責を託す事に罪悪感を覚えた。直ぐ様主君に謁見し異を唱えるも、一度決定している件を覆すことは叶わなかった。

道雪の養女宗茂などは不満を露にしており、道雪としては頭が痛い事でもあった。

この様に、ただでさえ危険な状況が更に悪化したのである。

この様に、ただでさえ危険な状況が更に悪化したのである。

ここは府内の町の外れにある建物。港に程近く周りの建物とは一線を画した佇まいである。

それもそのはず、この建物はいわゆる南蛮新教の拠点である。カブラエル布教長のような大物ならば、独立した住まいがある。宗教関係者なら教会等で起居する。ならばこの建物は何かといえば、南蛮の船乗りや商人が生活している建物である。

あくまでも表向きは、だが。

この建物には幾人かの南蛮人がいる。机にて酒を飲んでい

るのは、数日前にカブラエルと密談していたロウである。

「ヤレヤレ。カブラエルモエゲツナイ。ワザワザコロシタヤツノカンケイシヤヲアトニスエタカ。シカモコノチニスコシイタダケノヤツトハナ」と一人ごちる。

カブラエルが言うには「トール等より余程扱い易いでシヨウ。マア仮に私達に不利な事をスルナラバ、もしかしたら屋敷が火事になったりするかも知れせんガ」などと言っていた。

要するに暗殺するのだろう。

ロウは元々罪人だった。たまたま、カブラエルに拾われた。以後はカブラエルの敵を影から排除している。今のカブラエルはロウの尽力により立場を固めたといってもよい。彼は外出を制限されている。が望むものはカブラエルが用意する。殺しは仕事。いちいち犯罪者にならずともよい。「アマギソーマカ。ドウナルヤラ」

一月後筑前にて、立花鑑載、高橋鑑種が反乱。秋月残党が再び決起。同時に大内が門司に侵攻。大友は再び戦乱の渦中となる

虚ろな眼（後書き）

やり方誰か教えてください

大友の動乱（前書き）

スマートフォンで長文は厳しい。

相変わらず捏造だらけですがご容赦下さい

大友の動乱

九国の北部の要所、筑前地方。この地は大友家の勢力下にある。

かつての筑前地方は肥前の龍造寺、筑前の秋月を始めとした国人衆、豊後の大友、南方の相良。と正に混乱の只中だった。

この状況は当時の大友家重臣だった、戸次道雪、高橋鑑種らにより秋月を始めとした国人衆を討伐し、混乱を治めた

因みに秋月家の生き残りは周防の大内家に逃れた。大内家の当主義隆は自国内で彼等の滞在を認めている。

肥前の龍造寺は筑前の混乱時には家督争いが激化していた為に兵を出せなかった

そのような事のあった筑前で再び戦乱の兆しがあるのは何かの因果だろうか？

筑前岩屋城。大友重臣の一人、高橋鑑種の居城である。この城の最上階に一人壮年の男がいる。「立花殿も動くか。しかし、よりにもよって秋月家の残党が決起するか。難儀よな。しかし、この程度の状況をのりこえないなら大友に未来は無かるうがな」と一人こちる。彼等には彼等なりの主家に対する忠義があるのだ。喩え後世で悪と断じられようと、譲れないものがあるのだ。彼等の思いすら時代の歯車は巻き込んで廻る

戦国（前書き）

以前の内容を細かくしております。

戦国

筑前地方で大友を中心とした戦乱の兆しが見え始めた頃に、日ノ本全体に大きな動きがあった。

九国の南端である大隅、薩摩の両国において二つの勢力が激戦を繰り広げていた。攻め手は薩摩の島津。それに対して大隅の豪族肝付家を始めとして独立勢力が抵抗している。が、各勢力は独自に交戦している故に、島津家の当主貴久や、その娘たちに対し劣勢である。

隣国日向の伊東家の動向も気にかかる

。伊東家が大隅あるいは、薩摩に侵攻すれば状況が変わる可能性もある故か島津も予断を許さない状況

肥前では女傑、龍造寺隆信率いる龍造寺家が周辺の諸勢力を駆逐して地盤を固めつつある

周防では、大内家の武断派のトップである陶晴賢が大内家より離反。大内家の領土であった、安芸を支配している。なお、大内家の重臣にして、文治派の筆頭相良武任とは犬猿の仲である。

大内と国境を接する山陰の尼子家は大内と同盟を結んでいる。現在は目立った動きはない。

尼子、陶に隣接する毛利家は当主として毛利隆元を据えている。主要な武将は前当主の毛利元就、当主隆元の妹の吉川元春と小早川隆景、一門の毛利秀包がいる。が当主と姉妹の仲が良くないらしいので、不安が残る。

備前には主家より離反した、宇喜多直家率いる宇喜多家がある。配下に宇喜多三老である、長船貞親、戸川秀安、岡利勝がいる。周辺に大きな勢力がないので以外に巨大化する恐れがある

四国では、伊予の河野家が国人衆と交戦している。

土佐では長曾我部家と一条家と安芸家が交戦している。長

曾我部家当主の元親は父の国親より家督を譲られる。しかし、家督争いにて国力を落としている。讃岐は三好家の十河一存、三好実休が攻略中である。阿波は三好の本拠地である。

畿内では石山で本願寺が勢力を持っている。堺は三好の支配国である。大和では、松永弾正久秀率いる三好家の軍勢が畠山を圧倒している。播磨にも三好家の三好三人衆、当主の三好長慶が侵攻中

南近江の六角家は国内統一中

北近江の浅井家も国内統一中

越前の朝倉家は加賀に出兵。現地の一向一揆と戦闘している。

美濃では、蝮の異名を持つ齋藤道三が国人衆と戦闘。

尾張では、織田家の家督を父信秀より継いだ、織田信長が国内統一後、三河に進出。織田家の人材はとても豊富である。信長の側に仕える明智光秀、前田利家、前田慶次、羽柴秀吉がいる。

さらに先代より仕える柴田勝家、丹羽長秀がいる。隣国三河の徳川も配下についている。徳川勢には徳川家康、本田忠勝、服部半蔵、石川数正、井伊直政が属している。

駿河では今川家が勢力を誇る。駿河、遠江を支配し、三河にて織田とちかいうちに交戦すると思われる。今川家は当主今川義元を始めとして、軍師大原雪斎、義元の娘の氏真、忠臣で苦勞人の朝比奈泰朝が所属する。

甲斐の武田家は甲斐、南信濃、北信濃に勢力を持つ。当主の武田信玄。家臣団は風林火山陰雷の異名を持っている、筆頭家臣の山の山県昌景、軍師の陰の山本勘助、鬼美濃の異名を持つ火の馬場信春、内政や高速の用兵を旨とする風の内藤昌秀、内政を得意とする林の虎綱春日、苛烈な攻めを得意とする雷の真田幸村がいる。一門の一条信龍も所属している。さらに、北信濃の雄村上義清が降将として所属している。

しかし、武田家には一つ謎があり、武田家の屋敷には開かずの間があるらしい。

越後の旧長尾家、現上杉家は越後統一後に北信濃、越中に侵攻している。当主上杉謙信は軍神として名高い。家臣団は軍師宇佐美定満、養子の上杉景勝、戦上手の柿崎景家、内政官の直江兼続、鬼小島こと、小島弥太郎が所属している。これからは武田との戦闘は激化すると思われる

相模に本拠地をおく関東の雄北条家。当主の早雲、息女の氏康、一門の地黄八幡の異名を持つ北条綱成、北条の影といわれる風魔衆の風魔小太郎などがある。さらに文官筆頭の松田憲秀、大道寺政繁などと他の家臣の質も高い。現在武田、今川と三国同盟を締結している為に関東の統一に力をいれている。

上野の山内上杉家。当主は関東管領の上杉憲政。正直、優柔不断な人となりだ。しかし家臣団は優秀で、名将長野業正。剣聖にして、新陰流の開祖上泉秀綱がいる。この両名に太田三楽斎などの諸将をもって武田、北条の侵攻に抵抗している。

常陸の佐竹は下総、上総を統一しており、里見家家臣団を吸収している。現在は北で蘆名、西で北条と交戦中

中陸奥の伊達家は中陸奥統一後に米沢を奪回した。その後は北の南部と交戦中である。

世は戦乱の只中にある。戦乱の暗雲はまだ、晴れない。

戦国（後書き）

因みに村上、里見以外にはまだ滅亡してません

決断（前書き）

見ていただいております。

相変わらず捏造満載ですが、読んでいただけると幸いです

決断

筑前地方にて立花、高橋両名謀叛。この報告は大友の家臣団に動揺と衝撃を与えた。筑前の要である、岩屋城の高橋氏、立花城の立花氏は大友の家臣団でも主家に並び立つ程の名家である。先の秋月の騒乱において武功を上げた高橋。筑前地方にて他の勢力に睨みを効かせて牽制した立花。その両家の当主は戦上手でありながら、治世にも長じた人物であることは大友の家臣なら誰もが知っている事だ。更に大友の家督争いにおいては現当主を支持して混乱を鎮める為に尽力してもいた。故に彼等の謀叛など信じられないものが多いのである。

とにもかくにも府内の地にて緊急の評定が開かれた。

「立花殿も高橋殿もどういうおつもりなのか？今は団結して秋月の残党に対さねばならぬというに」と困惑の気持ちを隠せない人物は佐伯惟教。大友家と日向の伊東家との国境にある、佐伯城の城主である。「さりとて、大友家に対して謀叛を起こしたのはが事実ならば、討伐せざるを得ぬ」と苦渋の様相で口を開くのは吉岡長増。府内にて大友の外交などを担当している。「にしても、城井殿はまだこられないのか。蒲池殿は龍造寺や相良への牽制故に来れないのは分かるが」とこぼすのは吉弘鑑理。前述の城井殿とは、府内の北にある城井谷城の城主、城井重房である。蒲池殿とは龍造寺や相良との国境にある柳川城主の蒲池鑑盛である。彼は幾度もの戦で武功をあげ続けた猛将であり、防衛の為に居城を離れられず今回の評定には出席出来ない旨を伝えてきている。

諸将が義鎮の来るまでは、様々な情報を交換している中で戸次道雪、吉弘紹運、戸次宗茂は集まり話をしていた。「此度の秋月の決起。高橋殿、立花殿の謀叛。いくらなんでも不自然ですね、義姉様」と紹運が切り出す。「しかしながら、如何様な事情あれ謀叛とはどうなのでしょう義母様」と宗茂は思いを口にする。道雪は

「宗麟様が来なければ話を幾らしたところでせんなきこと。今は宗麟様と軍師の天城殿を待ちましょう」と話を切り上げた。軍師の下りで宗茂が顔をしかめたが、今言うべきではないと道雪は自重した。

評定より三十分ほど前。軍師である颯馬の部屋に書状が届いていた。颯馬は府内城の書庫にて、調べものをしていた為に部屋を留守にしていた。緊急の評定との事で用意をしに部屋へ戻り、書状を見つけたのであった。書状は畳に挟まれていた。曲がりなりにも軍師の部屋であるから、他人が許可なく入室出来ない筈である。それを踏まえると、これは他人に見られたくない類いの書状なのだろう。等と見当をつけてから、書状に目を通した。

書状は立花城の立花鑑載殿よりであった。彼は現在の太友や南蛮新教の危険性を事細かに記していた。が、颯馬にとってはある一文が何よりも重要だ。南蛮新教のある人物が恩師の角隈石宗を暗殺して、起居する寺社に火を放った。と記してあったのである。颯馬にとっては石宗は父親も同然。武将だから、敵に討たれるなら納得しよう。現に颯馬の実父はそうだった。だが、味方から暗殺されるとは。しかもそやつらはのうのと当主の庇護下で生きている。軍師とは感情を殺すことが寛容。とは今まで出会い、教えを受けた歴戦の軍師達の根幹にある考え方である。颯馬も感情に身を任せることの愚かさは理解している。いや、しているつもりだったらしい。「勘助殿や、雪斎殿、父上にも申し訳ないな」今の自身のあり方は間違いなく愚かだろう。されど一度家族を喪い、やっと父と慕える方に出逢えた。そしてそれを奪われた。このまま放置すれば、更に自身の様な身の上の者が増えるだろう。「やるしかない。吉弘様達には申し訳ないが。」颯馬はそう溢すと評定の間へと向かった。

その瞳に暗い焰を灯しながら

府内の北にある城井谷城にて、城井重房謀叛との報が府内

城にもたらされたのは、奇しくも颯馬が決断した時であつた。

府内の街、南蛮新教の教会にて、一人の壮年の宣教師が祈りを捧げていた。「神ヨ。コノ国の八百万の神々ヨ。願わくバ、彼等の前途に祝福を」彼は何を祈るのか？

闇夜はまだ明けることがない

決断（後書き）

さて、颯馬はどうするか。大友、南蛮新教の行方は。

次回は今週の半ばまでにはあげます

想いと願い

南蛮新教の宣教師は基本的には、日ノ本全土に布教すること
で東洋の拠点化を目論んでいる。しかし、これは軍事、政治的観点
からのものだ。カブラエルを始めとした、宣教師の過半は布教の成
果をもつて本国に帰国。しかる後の出世を夢見ている。特に若手の
宣教師達はこの傾向が強い。

一方では、壮年、高齢の宣教師は新しい地へ布教する。そ
こに野心や栄達への願いなどはない。彼等は最期をこの日ノ本で終
える事を覚悟している。宗教の布教と共に、日ノ本の文化や風習に
理解を傾けている。

宣教師フレンツはそんな壮年の人物である。彼はカブラエ
ルの様に現地で後ろ楯を得る。それを以て強硬に布教を推し進める
事を良しとしなかった。地道に人々へ教えを説いて回ればよいと
思っている。だが、カブラエルは布教長。故に表立つて異を唱えな
かった。

カブラエルの私兵とも言える傭兵達は自衛の為と聞いていた。
フレンツにはいささかの不安があった。が、かつて他の地域で、現
地の軍隊等と小競り合いがあった。だから必要性も理解出来ていた。
以前、この地の角隈石宗殿と直接話をした。その際に彼の
人物は自身には子がいない事。今は各地を回っている若者を屋敷に
留めている事。若者は自分を父親の様に慕っている事。南蛮新教と
大友の関係を話し合った。

その後、彼の寺社が焼け落ちて彼は亡くなったと聞いた。
フレンツは落ち込んでいたが、ロウと名乗るカブラエルの私兵より、
事の顛末を聞いた。

絶望した。あまりにカブラエルの浅慮さに。南蛮新教（自分たち）
の情けなさに。無力さに。故に以前親交のあった、立花鑑載様に打
ち明けた。正直、その場で斬られることを覚悟した。が、彼は斬ら

ずにフレンツを歸したのである。

それから一月も経たない内に彼は反乱を起こしたらしい。だからフレンツは教会で日ノ本の八百万の神々に祈っていたのである。

一方府内城の評定の間にて。諸將が整然と居並ぶ中、軍師の颯馬が真つ青な顔色で入室した。流石に初仕事が、この様な大規模な反乱の討伐を前にして、緊張しているのかと、殆どの諸將は思っていた。しかし颯馬の滞在先の吉弘家の鑑理、紹運は不自然だと思つた。颯馬は口を開く

「城井谷城城主、城井重房殿謀叛との事にございます。つい今しがたの報告です」空気が凍つた。

「ま、真の事なのか、軍師殿」といち早く立ち直り、真偽を問うは臼杵鑑速。彼は、大友家の家臣団の統制に腐心していた為に、動揺も酷かつた。

その場に義鎮が入室した。筑前地方の平定を戸次道雪、宗茂、吉弘鑑理、紹運。更に軍師の颯馬を派遣。後詰めに志賀親盛を。城井谷城攻略に臼杵鑑速、佐伯惟教を当たらせる事。吉岡長増は府内に留める旨をそれぞれに命じた。それ以上の事は平定後にするといい、自身は教会へと礼拝に参つた。

筑前地方へ出撃した、戸次、吉弘両軍と颯馬であつた。が陣幕にて颯馬の策に対して、宗茂は弱腰に過ぎると批判的な意見を述べた。元々宗茂はいきなり軍師になつた颯馬に悪い感情しか持ち合わせていない。ぽつと出の新参者が軍師に抜擢された。しかも、大友家の人間ですらない。ましてや、宗茂はつい昨年まで、武家の一員として認められていなかったから尚更だろう

とはいえ、今は火急の時。その話しは道雪、鑑理、紹運が諫める事で終わった。

問題は秋月方と立花、高橋の両軍がどう動くか。である。門司に侵攻している大内には、既に道雪配下の小野鎮幸を派遣している。大内も陶や尼子の戦線もある以上は、然程の戦力は回せないのは明らかである。戦上手な小野殿ならば、問題ないとは、この軍議にいての共通の認識であった。

しかしながら、大内と秋月は繋がっている。もし、仮に立花、高橋の両軍が大内、秋月と通じているならば、最悪の場合、本州からの入口である門司が大内に。九国最大の港町、博多津の守城の立花山城が大内、秋月連合の手に落ちる。城井谷城には大内の水軍が向かっているとの報もある。

肥前の龍造寺も本拠地の佐賀城を出陣したという。総大将は龍造寺軍師の鍋島直茂。副将に成松信勝、軍団には信常工り、百武賢兼という龍造寺主力の軍勢であった。が、颯馬や道雪、鑑理は蒲池鑑盛殿ならば防衛は可能と判断した。居城の柳川城も筑後では随一の堅城である。野戦を仕掛けぬ限りは敗けはない。そう断言出来る。

同刻、立花山城にて。最上階で立花鑑載は思う。（これでよい。

我々は、謀叛した反逆者。儂も高橋殿も城井殿も悔いはない。恐らく筑前への討伐軍は戸次殿、吉弘殿、軍師殿であろう。秋月や大内が裏でこそそしている様だが、好きにはさせぬ。儂も大友家の家臣。大友の行く末を案じておる。さあ、大友家の未来を担う若人よ、これを取り切らねば大友の夜は明けぬ。全力でかかってこい）

そこには、大友の重鎮でありながら、猛将の姿があった。（それにしても、口惜しいは南蛮新教のカブラエルよ。義鎮様の信任なくば切り捨ててくれように。フレンツ殿、せめて石宗殿の息子

には御主の思いをしかと伝えようぞ)

おまけ

作者的な、PS2太閤立志伝V的な勢力紹介

九国編

薩摩 島津家

当主、前当主もさることながら、島津四兄弟は半端ない。全体的に高い能力を持つ義久。合戦に活躍する義弘。外交、内政に長じる歳久。軍略に長じる家久。家臣団も精強だが、特筆すべきは島津名物、釣り野伏せ。強力です。従属水軍は坊津水軍。忍びは山くぐりを擁する。初期の城は三つだが、隣国の肝付や、近隣の伊東、相良を併合しやすい。

大隅、肝付家

能力はそれなりだが、家臣が少ない上に隣国の島津が脅威。なるべく早く軍備を整えよう。

日向、伊東家

肝付家に輪をかけて人材、能力が不足ぎみ。早期に家臣を揃えて軍備を整えよう

筑後、相良家

家臣団は文官、武官に大別出来そうだが、バランスはよい。頑張れば、島津や龍造寺に対抗出来る筈である

肥前、龍造寺家

当主の能力も高い。軍師の鍋島直茂も有能。四天王と木下も有能だが、階級が低いので早く階級を上げよう。家臣団は多いが大友に要注意。初期の内に交戦しやすい。軍備を整えてから挑もう

豊後、大友家

立花道雪、高橋紹運を主軸に交戦しよう。余程の事がないと負けない。従属水軍は豊後水軍。

阿蘇家、有馬家、宗家、松浦家は人材、能力的に厳しい。

が、阿蘇家は同盟国が大友なので比較的楽。松浦家は五島水軍を擁する。しかしながら、かなり厳しい。

おまけ終わり

残る種火、翻る旗（前書き）

今回は秋月家と反乱軍の話です。

残る種火、翻る旗

筑前、古処山城。その評定の間には幾人かの人影があつた。その内の一人、秋月家当主秋月種実。以前大友家により領地や家族を奪われた。その際に一部の家臣団とともに、城を脱出。その後、周防の大内家に匿つて貰つていた。

大内家に厄介になつてゐる時に相良武任や、冷泉隆豊らから、旧領回復の際の支援を約束して貰つていた。まずは、秋月種実が古処山城を占拠。しかる後に大内家が関門海峡を突破。門司を攻略する。との話であつた。

現に大内家は、秋月家の間接支援の為に家臣の杉重矩を、門司攻略の為に山口城より出撃させている。また、種実知らないが大友家の城井谷城へと水軍を派遣してもいる。しかし、大内の援軍だけをあてにするわけにはいかない。仮に秋月家の再興がなつたとしても大内の傀儡では意味がないからだ。秋月の軍勢で大友家を撃退する。これが寛容である。

「兄上。思うことは多々ございましょうが、今は目の前の大友に集中すべきかと。幸いにして、龍造寺よりは兵を動かしていただけるとの事。更には、立花山城の立花鑑載、岩屋城の高橋鑑種、更には城井谷城の城井重房までが大友家より離反したとの事。情勢は我等に有利にございましょう」と意気をあげるのは、種実の弟の秋月種信。自分たちと異なり、古処山城が陥落した際に筑後の国人衆の一人、筑紫広門殿に保護されていた。その為か九国の情勢にも明るく、此度の龍造寺への派兵要請を勤めあげた。なお、筑紫広門は今回の戦には賛意を示していないため、参戦してない。

「そうだな。ここまで来て躊躇う理由もないだろう。しかし、大友家もおちたものよな。城主がこぞつて離反するとはな。」
事実立花、高橋、城井の三名の謀叛は端から見れば大友の衰退を意味するように見えるだろう。少なくとも、大友家の内情を知らねば

理解出来はすまい。

「よし、種信。戦の準備を皆にさせよ。」と種実は弟に言い渡した。

「皆の衆。我等はかつて大友家により、この地を追われた。私と共に大内家に匿われたもの。この地に残り再起を願ったもの。様々な者がある。だが、我等は此処にいる。大友家を撃退し、秋月家を再興させる。皆ついて参れ！」

種実の檄に喚声を以て答える家臣達

（来るがよい。大友家よ。今回は負けぬ。父や兄上の屈辱を晴らしてくれる。）

かつてこの地より去った旗がこの地に翻っていた

同刻、岩屋城。城主の間にて

「申し上げます。周防国の大内家当主、大内義隆殿より、書状にございます」と小姓が書状を手渡す。

「ふん。大方大内家に降れ。とでも、言うのであろう。捨て置け」と一蹴するのは、高橋鑑種。これで幾度目の書状であろうか。始めは龍造寺。秋月、そして大内。しかし、此度の謀叛は、権力を握る為に非ず。行動を以てして、大友義鎮に忠言する為のものではない。（先代の事は無念であった。何かにすがりたくもなろう。されどすがったものに国を滅ぼされるのは、また違うだろうに）

思い返すは立花鑑載と城井重房、そして自分が立花山城で話を聞いた時の事。

「ま、誠に左様な事があつたと申されるのか？鑑載殿？」と嘘であつて欲しい。と願うように問いかけるは城井重房。

「左様。儂も出来れば嘘であつて欲しいが、間違ひなからう。石宗殿の寺社跡からは、火薬なるものが幾つか見つかつておる。フレンツ殿が、持ち込んだものと、儂が寺社跡で見つけたものは同じものらしい。島井殿にも、確認をとった故、間違ひなからうて。まあ、フレンツ殿が虚言を弄する様な御仁では無いのは知つてはい

たのだがな」と疲れた様に鑑載は返す

「ならば、間違いないのだろう。しかし、石宗殿は生前、南蛮新教の危険性を説いておられた。さりとて、武力をもつて廃するを是としなかったが。何とも救いのない話よな」とため息混じりに鑑種は溢す

「しかも義鎮様の信任を盾に、石宗殿の保護していた寺社も取り壊しているらしいな。義鎮様に取り合おうにも、礼拝だかに行ってしまったわ。更に問題なのは、若い家臣の中には、義鎮様に取り入る為だけに南蛮新教に入信するものも少なからずいる。ここはお諫めせねばならないのに」と半ば呆れている重房

「それもだが、道雪殿や、鑑理殿も問題であろう。鑑理殿はまだよいが、道雪殿は忠言すればいつかは刮目すると思ってる様だが。既に危険なのだ。これ以上は待てぬ。」とは鑑種の言である

「うむ。肥前の龍造寺は家督争いから立ち直ったと聞く。薩摩の島津は国内の統一がすんだそう。どちらにせよ、我等大友と近い内にまみえる事になるは必定。足元が不安定では、亡国の憂き目にあおう」鑑載は淡々と述べる

「私を知る限りでは、畿内では三好が勢力を拡大しつつあるらしい。阿波から讃岐や、播磨に侵攻している。伊予、土佐は国内統一に程遠いが、三好が本腰をいれたら直ぐに落ちよう。と」重房は四国の情勢を語る

「また、この筑前や筑後にも幾らかの反大友勢力もいるから予断は許さないだろう。」と鑑種は語る

「門司の小原鑑元殿が言うには、大内家には秋月家の残党がいるらしいな。大内家には陶や、尼子がいるから本腰は入れづらだろうが、警戒しておくに越したことはあるまい」と、鑑載も語る

「秋月か。嫡子は討ったが、次男、三男の行方は知れんかったな。もしかしたら秋月家の再興を期するかも知れぬ」顔をし

かめる鑑種

「そういえば、石宗殿の後任の軍師をご存知か？」と重房は二人に問うてみた

「ああ、天城殿か。それなりだが、知っている」と鑑載が応じる

「ほう。如何な御仁か？」興味深そうに鑑種は問う

「何でも奥羽の方の出らしい。家を取り潰されたそうで、諸国を巡っていたらしい。石宗殿を父親の様に慕っていたし、石宗殿も息子の様に思っていたぞ」と懐かしそうに話す鑑載

「どうするのだ？真実を打ち明けるか、黙ったままにするか？」と重房は問う

「教えねばならんさ。但し、儼を戦で破るか、大友家を裏切るかしなければ教えないが」と鑑載はさも愉快そうに語る

「そうだな。大友の未来を託すに値するか、試すのも一興。我等が裏切りを行い、その結果大友が纏まるならばやすいものよ」と鑑種も愉快そうに語る

護るべき物を護る。それこそが、彼等の本懐なのだ。汚名くらい、武家に生まれ、大友家の重臣となつてからは覚悟は出来ている。未来の為に、道を造る為に死ぬなら、それすら誇りとなる。三人は頷いてその場を後にした。

残る種火、翻る旗（後書き）

史実でも反乱を起こしたお二方ですが、譲れないものがあったのではないかと思います。

護るもの、遺すもの（前書き）

連続投稿です

護るもの、遣すもの

筑後、柳川城

この城は大友家の重要拠点の一つ。大友家の蒲池鑑盛が居城。攻めよせるは、龍造寺軍勢一万。護るは蒲池勢七千。

龍造寺、陣幕にて。

「成松殿、信常殿、百武殿。此度の戦はあくまでも陽動でございます。故に無理な攻めはせずに包囲に留めたく思いますが、いかがでしょうか？」と切り出すは、龍造寺家の軍師鍋島直茂。常日頃より鬼のような仮面をしている。が、思慮深き人物で主君の龍造寺隆信を支える忠臣である。

「軍師殿が左様に申されるならば、意味があつての事。我等に異論はない。だが、理由を聞いてもよいだろうか？」と返すは成松信勝。彼は、龍造寺四天王？の筆頭家臣である。

「ま、木下をつれて来てない時点で何となくそうじゃないかとは思ったけどね」と理解を示すのは信常エリ。彼女は龍造寺四天王？の先手を任される人物だ。戦に関する懸案に対する彼女の勘はかなりよい

「なるほどな。円城寺殿を共に残せば問題ないからな。確かにこの軍勢では、柳川城を落とすのは無理かもな。」賛意を示しているのは、百武賢兼。彼は武勇もさることながら、知略にも長けている。勿論龍造寺四天王？の一人だ。

そもそも今回の戦には秋月家の秋月種信よりの要請によって龍造寺は動いた。だが、要請では柳川城攻略。龍造寺隆信の忠臣である彼等にはやりづらい事、この上ない相手である。

大友家、柳川城主の蒲池鑑盛。彼は龍造寺の家督争いで、一時的に国を追われた隆信らを保護していた。『義に生きる将』と

まで称される彼の人柄は、龍造寺家臣の彼等から見ても好ましいものである。無論、それだけではない。

筑後一の堅城、柳川城。攻略には多大な時間と兵力を要する事は明らかである。更には、柳川城の東の阿蘇家からの援軍を考慮せねばならない。間の悪い事に、龍造寺は家督争いから立ち直ったばかり。現に一万の軍勢の中でもちゃんとした戦になるのは精々七千程。残りは鍋島直茂が後方で指揮をとらねばならぬ有り様である。故に無理な攻城戦は不可能であつた。

「やむを得ないでしょう。今回の派兵は我ら龍造寺家に動かせる兵力がある。そう認識させれば十分ですので。」と直茂は冷静に返す。この戦国の世では隙を見せれば家が滅びる。喻え、外見だけでも取り繕う事は必要なのだ。

一方、城井谷城に大内軍勢が攻め寄せるも、城井重房の巧みな戦に大内水軍はかなりの被害を出した為に大内軍勢は後退。

その後に城井谷城へ攻め寄せた臼杵、佐伯兩名の攻めにより、城井谷城は落城。佐伯、臼杵兩名の降伏勧告に対して、城井重房は

「城内の兵達はあくまでも大友家に仕えておる。許されるならば、兵達をお願い致す」と言い残し、城井重房は自害した。辞世の句は「枯野にも、新芽の芽吹く明日をみて」であつた。

結果的に大友家の被害は、大内水軍との交戦の際の三百と、城井重房であつた。

大内の杉重矩率いる門司攻略軍と、門司城小原鑑元の守備軍と援軍の小野鎮幸による大友連合軍。この戦は小原、小野勢の勝利に終わった。杉重矩は戦死しており、大内家には打撃となった。

筑前立花山城にて

「申し上げます。城井谷城での大内方の水軍を城井重房様が撃破。しかる後の大友方との戦で城井重房様が自害。城内の兵達は大友方に降ったとの事にございます」と小姓よりの報がもたらされた。

「そうか。重房は逝ったか。して、柳川城の蒲池勢はどうか」と鑑載は言葉少なく問うた

「は、柳川城の蒲池鑑盛様の軍勢は、龍造寺家の軍勢に包囲されております。攻城は今のところございませぬ。柳川勢は籠城しており、戦端は開かれてもございませぬ」と、困惑混じりに報告する。

「ふむ。予定通りか。問題あるまいで。で、岩屋の高橋勢はどうか。」と更に問う

「は、既に岩屋城より高橋鑑種殿率いる軍勢が出陣。岩屋城の留守部隊は、予定通りに大友方との戦には加わず、大友方が攻め寄せるなら、開城するよしにございます」と予定通りの報告をする。

そもそも、此度の戦は大友家に現状を突き付ける為のもの。実質的に大友方と交戦するのは、立花が担当。仮に高橋が合流出来れば、両軍にあたる。が、城井、高橋勢の役目は、今回の混乱に乗じる反大友勢の駆逐であつた。実際に打ち合わせの際には鑑種、重房は難色を示した。鑑載の度重なる説得故に、両名は折れたのだ。

（頼むぞ、鑑種。秋月に火事場泥棒など許す訳にはいかん。必ずや策を成してくれ）

その頃、秋月家、古処山城にて。

「何だと！高橋勢が此処に接近しておると？」

秋月種信は驚愕した。幾ら何でもおかしい。同盟の書状は送った。

が返答はない。今更同盟に応じるとは、考え難い

「ふむ、此方につくとは思えないな。合戦準備をさせよ。」と種実
は指示を出す。（どういふつもりかはわからんが、負けるつもりは
ない。あやつらとて、元は大友。容赦せん）と、種実は闘志を燃や
している。

結果から言うと秋月家は戦で敗退した。秋月種信、種実共に
戦死。主だった将も戦死した。古処山城も落城した。

当初は、秋月勢一万と高橋勢二千だったが、高橋勢が本陣を二千に
絞り、別動隊六千を秋月勢の後方から攻めさせた。これにより、秋
月勢が混乱した。別動隊により、秋月本陣を強襲。結果、秋月家の
将達が討ち死にした。一方の高橋勢も無事ではない。無論、自らを
囲としたのだ。本陣二千は死兵と化して守り抜いたが、戦死は千五
百を越えた。

元より主君の想いを知り、戦意十分。技量も高い高橋勢だか
らこそ出来る芸当だった

軍勢が五千を割り込んだ高橋勢だが、古処山城に兵を三千
残し、二千に届かない手勢で立花山城へと向かった。

筑前の争乱も残すは立花、高橋勢のみ、大友家の大一番はこれから
である。

護るもの、遺すもの（後書き）

間もなく大友家の争乱も終結します。

これからどうしようか？

忠義（前書き）

い

相変わらずの出来ですが、よろしければ是非ごらんくださ

忠義

筑前地方、立花山城にて鑑載は思う

（いよいよか。重房は大内水軍を止めた。大友の為に戦った。大友家への忠誠を強く持つあ奴にとつてはさぞや、本懐であつたろう。鑑元も小野勢との共闘で門司を護り抜いた。大友家の現状に不満あらうとも、流石よな。

鑑種は秋月の亡霊どもを討伐した。あ奴ならば、合流するべく動いとるだろうて）

少しばかり鑑載は一人思い返す。

全ては先代の家督継承により始まった。

当時、大友家の跡継ぎは、長女の義鎮様と長男の大友晴英様、次男の塩市丸様の何れかであつた。

しかし、長男の晴英様は大内義隆より養子縁組みの話が来ていた。したがって、義鎮様か、塩市丸様のどちらかが家督を継ぐということであつた。無論の事だが、最初は先代も義鎮様に家督を譲るつもりだった。

ところが、義鎮様がその頃から南蛮の諸事に興味を持ち始めていた。これを危惧した先代は突如、塩市丸様に家督を譲るとの下知を出したのだ。

これにより、一時的にだったが、義鎮様の派閥と塩市丸様の派閥に大友家が大きく割れた。

どうあれ、家督争いを良しとせぬ鑑載、鑑種は中立を保った。他には、戸次道雪、吉弘鑑理ら一部の家臣も中立であつたが。

それに対して先代は、始めの発言を以て義鎮様を次期当主に強く推した家臣団の筆頭格を府内に呼び出した。

と同時に義鎮様を湯治に送り出し、府内より遠ざけた。

悲劇はその時に起こった。呼び出しに応じた家臣との軍議中に先代が家臣の一人を切り捨てた。恐らくは先代に義鎮様の事を進言したのだろう。

それに対して家臣の一人が、先代を切り捨てたのである。更には、府内に居られた塩市丸様すらも殺害し、自決したのだ。

これにより、義鎮様が 家督を継ぐとなった。が、義鎮様にとっては父親と弟を同時に喪い、心の支えとして南蛮の教え、つまりは南蛮新教に傾倒したのであった。

この後、塩市

丸様を推していた家臣が義鎮様に反意を持っていた為に討伐したので、大友家の力は一時的に落ちた。

思えば、あの時に府内に居なかった事。先代に忠言しなかった事。大友家の跡継ぎにおいて積極的に介在しなかった事。全てが悔やむべき事なのである。

（義鎮様はあの時から前に進めておらぬ。故にカブラエルの様な小者を重用してある。あの者は何としてでも廃さねばならぬ。間違はなく大友家に無用の混乱を招いているのはあ奴だからな）

カブラエルは大友家の家督争いの混乱の最中に義鎮に接近。南蛮新教の教義を以て義鎮の信用を得た。教義自体は道理にかなうものだったが、拠点である教会を建立するために府内の寺社を取り壊した。勿論、これは義鎮の判断に基づくものであったが。さりとて、カブラエルの迅速すぎる行動で反対派の反発を招いたのだ。

その頃からカブラエルの重用を危惧する人物は増えた。以後、一部の反南蛮新教派は反大友ともいえる行動をとり始めた。

その頃から、南蛮側もカブラエルへ権力を集中させた。なお、権力を不要としたフレンツ等はこれに対して不信を抱き始めた。

この頃に鑑載はフレンツと出会っている。

当時のフレンツは南蛮新教の在り方を憂いていた。しかし、同調する権力者は皆無な為に表立って行動出来なかったのである。

鑑載、フレンツはある意味似た者同士だった。ただ単に、鑑載は権力者。フレンツは宗教家だっただけの事。

（ふふ、今更詮無き事よ。鑑種はまもなく到着しようて。）鑑載は思う。今はただ、走り抜けるのみ。あとの事は大友家の者達が何とかする。

それから程無くして、高橋鑑種率いる高橋勢が立花山城へ到着した。

府内の街にて、フレンツはある人物と会っていた。

「これが依頼の品にございます。大量に摂取したら死に至ります。くれぐれもご注意ください。出来ますように。出来れば使わぬ事をお祈りさせていただきます。全ては民の為に」

そう言い残し男は去って言った。

「解っている。だが、もしもの時には覚悟を決めよう。それが南蛮新教（私達）の責任の取り方だ。」

フレンツはそう呟く。

同時刻、府内のとある教会にて

「ツイニココマデキマシタネ、カブラエル布教長

」
カブラエルに向かい合う南蛮の商人は嬉しそうに語る

「マア、ここまで来るには苦労しましたガ。これでツールやショールン達が立花勢を破れば全て巧くいきますネ。」

とカブラエルも返す。

フレンツはそう呟く。

同時刻、府内のとある教会にて

「ツイニココマデキマシタネ、カブラエル布教長

」
カブラエルに向かい合う南蛮の商人は嬉しそうに語る

「マア、ここまで来るには苦労しましたガ。これでツールやショールン達が立花勢を破れば全て巧くいきますネ。」

とカブラエルも返す。

カブラエルとしても、ここまでの苦労が報われる時が近づいているのだ。その声には、感慨深さを含んでいた。

本来、カブラエルは布教長ではない。前任の布教長はあくまでも、現地との調和を重んじていた。故に布教もあまり進まなかった。

だが、カブラエルが義鎮に取り入り、強引ともいえる布教を進めた為に前任の布教長と対立した。不思議な事に前任の布教長はこの頃に亡くなっており、後任には、大功をあげたカブラエルがついたのである。

カブラエルは異国のこの地に何を求めたのか？南蛮の商人は何を求めめるのか？フレンツの想いは。鑑載の真意は？

後に九国の乱と称される大戦は間もなく、
転機を向かえる

忠義（後書き）

次回は人物紹介となります。

主要人物紹介

（主人公）天城颯馬

元は東北の出身。諸国を旅していた。大友家に一時的に滞在した際には、大友家の軍師の角隈石宗に世話になった。その際には石宗に実の息子の様に接してもらっていた。

再度、大友家に滞在した際に大友家の軍師に任命された。基本的には、穏やかな人となりで、武芸は人並みであるが、軍略は一流といえる才を持つ。ただし、自分に自信を持ってないので周りからはわかりづらい

大友勢

吉弘鑑理

豊後大友家の重臣の一人。豊後三老と称される人物。

治世、軍事共に優秀な人物であり、後述の吉弘紹運や、戸次宗茂の父親。妻とは早くに死別しており、二人の娘を男手一つで育てた苦労人。男手一つで育てた故か男勝りに育った紹運を見て、宗茂だけでも女らしく育て上げるべく、同僚の戸次道雪に宗茂を預けた。が、道雪も女傑である為に宗茂も男勝りに育った事を今は亡き妻に詫びていたりする。

立場として主君義鎮にも忠言を行う事も多い。颯馬とは石宗を通じて面識があり、颯馬の軍師任命には複雑な想いをもつ。

吉弘紹運

前述の吉弘鑑理の長女。合戦では常に先陣を駆けており吉弘勢一の武人。しかし、治世については父親の鑑理が行っているので、然程に知識がない。

人柄は仁義を重んじる。情け深くも、戦乱の世に生きる事

の意味を理解している。

表裏が無い真っ直ぐな人物である故に様々な人から慕われる。

戸次道雪を義姉様と慕っており、仲はかなりよい。たまに道雪にかかわれるが。

妹の宗茂とも仲は良い。が、妹の無鉄砲ぶりを心配する事が多く、宗茂に説教をよくしている。（道雪や鑑理から言わせると、自分を省みて欲しい。と思われている事は全く知らないのであるのだが）

颯馬とは軍略や武芸を教えあう仲である。

色恋沙汰には疎いにもほどのある人物でもあり、自分の胸を邪魔と思つてすらいる。

戸次道雪

大友家の重臣の一人で紹運からは義姉様と呼ばれ、宗茂よりは母様と呼ばれる。

知勇兼備の名将で、その名前は鬼道雪と称される程。若くして下半身が麻痺するも車椅子？に乗って戦場を駆け抜ける。兵や同僚からの信頼も高く、主君への忠言も行つ事も少ない。兵や同僚からの信頼も高い。

現状を憂いているが、主君の義鎮が刮目することを疑わずにひたすらに忠誠を捧げている

人柄は温厚であるが、親しい人物や気に入った人物はからかう癖があり、意外とお茶目。ただし、規則などには厳格であり、身内贔屓などを好まない清廉潔白な人物でもある

颯馬との直接の面識は颯馬が軍師に任命されてからだか、石宗より話は聞いている。颯馬や宗茂に危うさを感じてはいるが、今は見守るに留めている

戸次宗茂

元の名は吉弘統虎。吉弘鑑種の次女で紹運の妹。後に戸次道雪の養

女となり戸次宗茂と改名した。

つい最近まで武家としての立場をもたなかった為か、頑なに武家としての自分を持っている。よく言えば、真っ直ぐだが、愚直とすらいえる言動がよく目立つ。その為か敵も味方も多い。道雪、鑑理、紹運がさりげなくたしなめているが、若いせいか善し悪しをはっきりさせたがる。

ぱっと出の颯馬には不信を抱いており、颯馬の性格と相まって仲が良いとは言えない。が、決して器量が無いわけではなく、単に不器用なだけだったりするのだが

色恋沙汰には全く興味がなく、その様な話自体を嫌う。しかし、義理の母親の道雪からはそのあたりを密かに心配されてたりする。

臼杵鑑速

大友家の内政官。ただし戦働きが出来ないわけではない。比較的内政よりなだけである。

鑑理、道雪等とは親しい。現状の大友家を内政面から支える人物である。

吉岡長増

大友家の家臣団の一人。主に他勢力の情報収集、他家への調略など外交面で活躍する人物。

府内に兵をおいておける権限を持つが、石宗の件の際には、阿蘇家への援軍に出ており、石宗の死に責任を感じている

佐伯惟教

豊後大友家の南方の守りを担当する城主。戦においては、こと防衛戦に目覚ましき活躍をみせる。日向の伊東家と頻繁に小競り合いを

行っている。

蒲池鑑盛

筑後柳川城主。筑後の守りを担当する。筑後は南方の相良、肥前の龍造寺と接しており、大友の最前線ともいえる。

かつて、敵方の龍造寺の家督争いの際に争いに破れた龍造寺隆信らを城下町にて保護した。

それより、義心厚き将と呼ばれる。

筑後一の堅城柳川を利用して、長く敵方の侵攻を防いだ人物。

元大友勢

立花鑑載

九国随一の貿易港、博多津と本州との境目の門司の双方に睨みを効かせる立花山城城主。その立花山城城主だけあって大友家の中でも重臣中の重臣。

治世、軍政共に高い能力を誇る。今回の状況をつくりだした人物ともいえる。

大友家の中でも最高齢であり、先代から仕える身でもありながら、高橋、城井等と諮って謀反を起こしたりと底の知れない人物

高橋鑑種

筑前の岩屋城城主。大友家の中では、立花、高橋が他の家臣より抜きん出て、大友家と並び立つ程である

鑑種自身も、肥前の龍造寺や大内との戦にて功をあげた名将で隣国でも、名の知られた人物

戦においては、自身が前線にて指揮をとり、時には自らも敵陣に斬り込む程。今回の立花鑑載による謀反に賛同した一人

城井重房

大友家本拠地の府内より北にある城井谷城城主。

城井家は大内家の家臣だったが、先代の大内家当主との確執により、大友の家臣団に加わった。

それ故に、大友家に対する忠誠は並々ならぬものであった。重房は元々水軍衆を束ねていたので、水戦を得意としている。今回の立花鑑載の謀反に乗じた大内水軍を城井谷城にて打ち破る武功をあげた。

しかし、立花、高橋両名と連携して謀反を起こしているために、城の將兵を逃がして自害して果てた

南蛮新教

カブラエル

大友義鎮に取り入り、南蛮新教の勢力を拡大した人物。傍目には然程に目立たないが、目的の為に手段を選ばない。

大友家の良識派からは忌み嫌われている。

後述のロウは彼の私兵である

ロウ

出身、経歴等が不明な人物。元罪人らしい。カブラエルから重用されている。

角隈石宗の死に深く関係している。

その一方で、カブラエルとは対立している筈のフレンツとも関係している、謎の人物

フレンツ

南蛮新教宣教師。以前はインドにいらしたらしい。布教の際には、現地との調和を重んじる良識派。

立花鑑載とは面識があり、角隈石宗の死の真相を伝えたり、日本の本の神教にも理解を示している数少ない人物

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3978w/>

戦極姫異伝

2011年11月24日17時42分発行